

フットサルにおけるコーナーキックとキックインに関する研究 ーパス本数からみたセットプレーの傾向についてー

コーチング研究領域

5016A028-8 玉置 研二

研究指導教員：倉石 平 教授

I. 序論

セットプレーはアウトオブプレーになった状態からプレーを再開する方法である。ボールが止まった状態から始まるセットプレーは試合の流れを変える重要な要素と考えられている。

しかし、セットプレーに関する先行研究に関する先行研究は少なく、セットプレーを構成する要因や関係性が明らかにされていない。また、ワールドカップのテクニカルレポートにおいてセットプレーに対する定義は説明されておらず、分析者の主観によって分析されていると思われる。

本研究では日本フットサルリーグ(以下Fリーグと略記)を対象としてコーナーキックとキックインにおけるパスとシュートの関係に着目し、シュートを放つ条件を明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 分析対象

Fリーグ2016-2017シーズンのうち、プレーオフ6試合を除くリーグ戦全196試合を対象とした。

2. 分析方法

PC用ゲーム分析ソフトを用いて試合映像を見ながらコーディングを行う記述分析法によってデータを集計した。

3. 分析項目

試合中に行われたコーナーキックとキックインにおいて、試行回数、開始位置、プレーが完結するまでに要したパス本数、シュートを放った回数の4項目を集計した。集計したコーナーキックとキックインの回数に対するシュートを放った割合を示すシュート率を求めた。

4. 統計処理

本研究では上位検定としてカイ二乗検定を行い、有意差が認められた場合、下位検定として残

差分析を行った。有意水準は5%未満とした。

III. 結果および考察

1. コーナーキック

コーナーキックにおける左右の違いとシュートの有無についてカイ二乗検定を行った結果、有意差は認められなかった($\chi^2=.02$, n.s.)。また、左右の違いとシュートを放つまでのパス本数についてカイ二乗検定を行った結果、有意差は認められなかった($\chi^2=6.957$, n.s.)。

シュートを放つまでのパス本数は左右とも2本以内で約90%を占めていた。セットプレーは3タッチ以内であるというSilva et al.(2004)の定義もこの考察を支持している。ホリンズ(2013)やウォール(2013)はパスが増えればミスが増えることを示唆しており、バスケットボールと同じくピッチの狭いフットサルではボールを奪われた場合、フィールドプレーヤーが戻れない場面も起こりえるため、少ないパス本数で簡単にプレーを完結しようとしたと考えられる。

一方、ボールとマーカーを同一視野に収めにくいコーナーキックでは一瞬の動きでマークを外す事ができる。また、サッカーのコーナーキックよりパスの距離が短いので、守備側に対応される前に素早くシュートに持ち込むことができる。さらに常にマイナスのボールであり、天候の影響が無く、ローバウンドのボール、滑らかなピッチの表面が相まってサッカーに比べ、シュートしやすい状況が生まれていると考えられる。

2. キックイン

キックインにおける開始位置の違いとシュートの有無の関係についてカイ二乗検定を行った結果、有意差が見られた($\chi^2=1494.689$, $p<.001$)。下位検定として残差分析を行ったところ、K1か

ら K3 まではシュートを放つ傾向が有意に強く、K4 と K5 は有意に弱かった。シュートが有意に多かった K1 から K3 のエリアはピッチを 3 分割したアタッキングサードと呼ばれるエリアとほぼ重なっていた。セットプレーを行うか、定位置攻撃を行うかの判断の目安を K3 から K4 のエリアで行っていると考えられる。

開始位置とシュートを放つまでのパス本数の関係についてカイ二乗検定を行った結果、有意差が見られた ($\chi^2=1607.088$, $p<.001$)。下位検定として残差分析を行ったところ、K1L では 1 本のパスが有意に多く、3 本以上のパスが有意に少なかった。K1R では 1 本のパスが有意に多く、2 本以上のパスが有意に少なかった。K1 はコーナーキックに近いため、コーナーキックと同様のことが考えられる。K2L では 2 本以内のパスが有意に多く、3 本以上のパスが有意に少なかった。K2R では 1 本のパスが有意に多く、4 本以上のパスが有意に少なかった。K2 ではコーナーキックや K1 と比較した場合、守備側がボールとマーカーを同一視野に収めやすくなっているが、相手陣内深くに味方選手が集まっているため、コーナーキックや K1 と同じく 1 本のパスでシュートに持ち込もうとしたと考えられる。また、左右の違いが見られるが右利きの選手が多いことが反映されたと考えられる。K3L では 2 本から 3 本のパスが有意に多く、1 本および 5 本以上のパスが有意に少なかった。K3R では 2 本のパスが有意に多く、5 本以上のパスが有意に少なかった。K4L では 1 本のパスが有意に少なく、4 本以上のパスが有意に多かった。K3 はゴールから距離が離れており、裏のスペースがある一方で守備側がボールとマーカーを同一視野に収めやすくなっている。パスをつなぐことで、マークを外そうとしたと考えられる。K4R では 1 本のパスが有意に少なく、3 本以上のパスが有意に多かった。K5 では 1 本のパスが有意に少なく、3 本以上のパスが有意に多かった。K4 および K5 について、1 本のパスでゴール前に出した場合、パスの距離が長い上、守備側の選手はボールとマーカーを同一視野に収めに

やすく有利になっている。このため、1 本のパスでシュートを狙うのではなく、パスをつないだり、ドリブルを用いることで守備陣形を崩してシュートに持ち込もうとしたと考えられる。

IV. 結論

コーナーキックやキックイン K1 および K2 (ゴールラインから 10m 以内) はパス 1 本、K3 (ゴールラインから 10m 以上 15m 以内) においては 2 本のパスをつないでシュートを打つ傾向がある。

本研究ではパスという基本的な技術に着目し、シュートにいたるセットプレーを分析した。分析者の主観によって分析されていると考えられていたセットプレーに評価指針を提示することができた。また、実際の指導現場においても有効なセットプレーのパス本数や開始位置を掴むことで、より効果的なセットプレーやトレーニングを構築することが期待できる。

今後の課題と展望について、他競技との相違点や類似点がうかがえた。今後は他競技との相違点や類似点に着目して研究を行うだけでなく、フットサルを対象とした研究を進めていく必要がある。

また、量的な研究において、選手のアライメントやフォーメーション、ボール位置の計測について信頼性を担保する方法を検討する必要がある。

本研究ではセットプレーのパスの出し手やシュート時にボールが接触した身体部位を調査していなかった。今後、パスの方向、スピードの調査と合わせてセットプレー開始位置やシュート位置との関連を調査する必要がある。本研究では指導現場を参考にキックインの開始位置を分類したが、試合時間や得点差などの試合展開を考慮した関連性、さらにシュートを意図したプレーとそうでないプレーの切り分けを調査する必要がある。また、実際の指導現場を対象とした質的研究を行うことで、今回得られたデータや前述の課題との関連を検証する必要がある。